

視聴者心理を巧みに操るメディア 客観的に認知する力を具えよう

「偏向報道」という言葉が最近よく聞かれる。マスメディアによる一方向への礼賛や批判には大きな問題がはらんでいる。鵜呑みにするだけでは、脳の老化を促進させてしまう恐れがある。

報道のあり方が問われている

最近に始まったことではないが、芸能人らの不祥事がよく取り上げられている。いわゆる大御所と呼ばれる芸能人が、一度のスキャンダルによって、TVの世界からあつという間に消え去って行く。

実際、それほどの罪を犯したのかと言えば、確固たる証拠がなかったり、

証言自体の信憑性が低いことなどが後で分かってきたりするが、その頃には既に負のイメージが植え付けられてしまっており、状況を改善させることは難しくなっている。

人の人生を大きく転落させ得る報道を、よく十分な取材や裏付けを得ないまま発信できるものと恐ろしく思う。また、ニュース番組の中では、たいはい何らかの事故や事件の報道がある。不慮の事故の場合は事実のみが簡潔に



真偽不明や情報の偏りが混じったメディアからの情報を、正しく見極める力が求められる。

報じられる一方で、誰かが誰かを故意に、または故意ではないにしても責められる要因があつて殺傷した場合などは、なぜそこまで？と思うほど事細かに報道される。

これらを見て感じることは、TVをはじめとするマスメディアは、視聴者に「あいつはけしからん。ひどいやつだ」と思わせやすいターゲットを常に探し、絶えず視聴者に提供し続けており、視聴者側は、そのターゲットを誹謗する

だけ誹謗するが、ある程度すれば飽きてしまうので、新しいターゲットを得るためにまたTVを点けるといった、極めて不健全な関係性で成り立っているのかもしれないという点だ。

つまり、メディアの報道のあり方がおかしいと思う感覚は、見方を変えれば、我々視聴者が求めているものをより提供しようとした結果、今日のメディア報道のあり方ができ上がったと捉えることがより正確かもしれない。

脳科学の観点では、人間という生き物は、自分が「許せない」と思う攻撃対象を見つけ、その人に対して、自分なりの正義の制裁を加えることで、脳の快楽中枢が刺激され、ドーパミンが放出されるという。

さらに、日本人は、地理的にはか昔から台風や地震などの自然災害と隣り合わせで生きて来た。ひとたび大きな災害が起きると、昔も今も復興が必要になる。復興は皆で助け合いながら進めるため、個人の意思よりも集団の目的を優先する人が育ちやすかったことが予想される。

そういった自然災害の観点からも、

社会のルールを守る人を評価し、社会のルールを守らない人を排除する文化が形成されて行ったであろうことは理解できる。

また、日本人はセロトニンというホルモンが他国の人々に比べて少ないことが報告されている。セロトニンが少ないと、自分を抑えてでも他の人のためにしようという利他的な行為をする良い面もあるが、一方で理不尽な人の行動に対する寛容度は逆に低くなるという悪い面もあるという。

固定観念や常識に捉われない

これらの観点から、日本人は特に、社会の規範から外れた人や自分が気に入らないと認識した人に対して、排除し、攻撃しやすい性質を強く持っていると言えるかもしれない。

しかし、できるならば、他者を攻撃して自分だけが幸せになるよりも、他者も自分も幸せになるような人間性を身に付けたいものである。

再び脳科学の観点に戻れば、他者に共感し、他者を尊重し、認めて行くこと

いう機能は非常に高度なもので、前頭葉の中の前頭前野と呼ばれる部分で行なわれているようだ。

この部分は、発達に時間が掛かり、およそ25〜30歳で成熟するが、衰えて行くのもまた早いという。一般的に、加齢とともに思考が保守化すると言われるが、それは前頭葉の衰えにより、自分以外の考えに共感できなくなるからである。

衰えない、老けない脳にするためには、普段から「自分はこう思う」、「こうに決まっている」といった固定観念や自らが築き上げた常識にとらわれないことが肝要だ。

また「自分がこういう気持ちでいることを自覚している」というような、自分自身を客観的に認知する力（メタ認知）を働かせることは、前頭前野を鍛えることに繋がる。

自分を振り返る時間を確保しながら、頑固にならず、人の意見をよく聞くように意識することが、脳を老化させず、結果的に他者に対して寛容で、豊かな人生を送ることができるといえる秘訣であろう。

（立川秀明）